

あとがき

上毛歌留多というものがある。群馬県の偉人、歴史、風物、産業などを、遊びを通して子供達に教えるために、歌留多の形をとったものである。その中に、

「和算の大家、関孝和」

という札がある。生年については、諸説あってはっきりしないが、上州人は、上野国藤岡（現在の群馬県 藤岡市）であると信じている。

関孝和は、日本の独自の数学「和算」の発展に重要な貢献を果たしたことは、ご存知の方も多と思う。「発微算法」を著し、未知の数値を X として求める、いわゆる代数の計算法を発明し、また現在における行列式を発案していることは、当時の日本の数学の水準の高さに驚愕する。従来の授時暦から新たに日本の改暦を行った渋川春海の生涯を描いた沖方丁著「天地明察」（角川文庫）の中で、関孝和も授時暦を研究していたことが添えられている。天と地を結ばんと、不動の北極星を仰ぎて新たな数理を見出そうと、もがき苦しむ男達が描かれている。

「人が正しき術理をもって、天を知り、天意を知り、もって天下の御政道となす」

これから原子力はどうなるか、どうすべきか。その御政道は如何に。その潮流の中で、原子力に係る者の気持ちは同じであろう。家々が灯す明かり、それを絶やさないと1手として、原子力の基石を打ったのだと。核と安全を結ぶ天元は何処にあるのか、我々も彼等と同じに、もがき苦しまなければ得られないであろう。我々に与えられた原子力という遺題に、誤謬なる算額を掲げてはならぬ。この道を選び共に生きることを決意したその素志を研ることなく、天に向かいて空を仰ぎ、己が信じる北極星に向かって走れ。

2012年6月号編集 中村

日本原子力学会核データ部会
核データニュース編集小委員会

喜多尾憲助（元放医研）、井頭政之（東工大）、石川 眞（原子力機構）、
岩本 修（原子力機構）、中川庸雄（元原子力機構）、吉田 正（東京都市大学）、
渡辺幸信（九大）、山野直樹（福井大）、河野俊彦（LANL）、大塚直彦（IAEA）
中村詔司（委員長、原子力機構） [編集]石橋貞子